E-ASIA
university of oregon libraries
http://e-asia.uoregon.edu

建築の本義

伊東忠太

初出：「建築世界」
1923（大正 12）年 9 月

建築の本義

伊東忠太

近頃時々我輩に建築の本義は何であるかなどゝ云ふ六ケ敷い質問を提出して我輩を困らせる人がある。これは近時建築に對する世人の態度が極めて眞面目になり、徹底的に建築の根本義を解決し、夫れから出發して建築を起さうと云ふ考へから出たことで、この點に向つては我輩は衷心歡喜を禁じ得ぬのである。

去りながらこの問題は實は哲學の領分に屬するもので、容易に解決されぬ性質のものである。古來幾多の建築家や、思想家や、學者や、藝術家や、各方面の人がこの問題に就て考へた樣であるが、未だ曾て具體的徹底的な定説が確立されたことを聞かぬ。恐らくは今後も、永久に、定論が成立し得ぬと思ふ。若しも、建築の根本義が解決されなければ、眞正の建築が出來ない

せけん　ほと　すべ　けんちく　こと／″＼　しんせい　けんちく
ならば、世間の殆んど總ての建築は悉く眞正の建築でない

じつさい　おい　かならず　しか　かこく
ことになるが、實際に於ては必しも爾く苛酷なるものではない。

もちろん　もんだい　せんもんか　よつ　あくまで　けんきう
勿論この問題は專門家に由て飽迄も研究されねばならぬのであ

わがはい　こゝ　ふか　てつがくてきぎろん　たい　きは
るが。我輩は、茲には深い哲學的議論には立ち入らないで、極めて

つうぞくてき　これ　くわん　かんさう　たん　の　み
通俗的に之に關する感想の一端を述べて見よう。

わがはい　ま　けんちく　もつと　ぢうえう　れいすなは　ぢうか　とつ　これ
我輩は先づ建築の最も重要なる一例即ち住家を取て之

かんが　み　ぢう　なほしよく　ごと　い　かん　しよく　ほんぎ
を考へて見るに「住は猶食の如し」と云ふ感がある。食の本義

つい　せいりえいせい　がくり　かうしやく　ところ　そ　だ　けつ
に就て、生理衛生の學理を講釋した處で、夫れ丈けでは決して

えうれう　え　なん　しよく　しめい　じんしん　えいやう
要領は得られない、何となれば、食の使命は人身の營養にあるこ

もちろん　だれ　じつさい　あた　いち／＼えいやう　いかん
とは勿論であるが、誰でも實際に當つて一々營養の如何を

ぎんみ　く　もの　だい　ま　あぢ　び　もくてき　く
吟味して食ふ者はない、第一に先づ味の美を目的として食ふのである。

しか　あぢ　び　おほ　またどうじ　えいやう　よろ　ひと
併し味の美なるものは多くは又同時に營養にも宜しいので、人は

しらず／″＼えいやう　う　ところ　てん　はいざい　めうぎ　しか　いか
不知不識營養を得る處に天の配劑の妙機がある。然らば如何な

しゆるゐ　しよくもつ　てきたう　い　ぐたいてき　じつさいもんだい
る種類の食物が適當であるかと云ふ具體的の實際問題にな

かいけつ　はなは　めんだう　ねつこく　かんこく　しよく
ると、その解決は甚だ面倒になる。熱國と寒國では食の

てきひ　ちが　おな　ふうど　ひと　ねんれい　てきひ　ちが　おな
適否が違ふ。同じ風土でも、人の年齢によつて適否が違ふ、同じ

ねんれい　たいしつしよくげふとう　したがつ　せんたく　ちが　うへこじん
年齢でも體質職業等に從て選擇が違ふ。その上個人

とくしゆ　せいへき　いはゆるす　きら　かふ　この　ところ
には特殊の性癖があつて、所謂好き嫌ひがあり、甲の好む處は

おつ　きら　ところ　いはゆるたでく　むし　す　ず　うへこじん
乙が嫌ふ處であり、所謂蓼喰ふ蟲も好き好きである。その上個人

けいざいじやうたい　よつ　ぜひ　そあく　しよく　がまん　ひと
の經濟狀態に由て是非なく粗惡な食で我慢せねばならぬ人もあ

ぜひ　くわりやう　びみ　く　ひと　ひつきやう　にん　いろ
り、是非なく過量の美味を食はねばならぬ人もある。畢竟十人十色

けつ　りつ　ゆ　しよく　ほんぎ　りそう　と　み
で、決して一律には行かぬもので食の本義とか理想とかを説いて見た

ところ　じつさいもんだい　あま　やく　た　そ　せい／″＼
處で實際問題としては餘り役に立たぬ。夫れよりは「精々うま

もの　てきど　く　い　もつと　かんたん　えうれう　え　へうご
い物を適度に食へ」と云ふのが最も簡單で要領を得た標語である。

けんちくこと　ぢうか　まさ　とほ　せい／″＼ぜんび　けんちく
建築殊に住家でも、正にこの通りで、「精々善美なる建築を

つく　い　さいご　けつろん　しか　ぜんび　なん
造れ」と云ふのが最後の結論である。然らば善美とは何であるかと

はんもん　それ　しよく　くわん　の　ところ　どうこうゐきよく
反問するであらう。夫は食に關して述べた所と同工異曲で、

けんちく　あ　い　ぜん　くわがくてきでうけん　ぐそく　び
建築に當てはめて云へば、善とは科學的條件の具足で美とは

げいじゆつてきでうけん　ぐそく　そ　じつさいもんだい
藝術的條件の具足である。さて、夫れが實際問題になると、

とち　じやうたいふうど　くわんけい　ぢうしや　みぶん　きやうぐう　しゆみ
土地の狀態風土の關係、住者の身分、境遇、趣味、

せいへき　しさん　かぞく　しよくげふ　たしゆ／″＼ざつた　そいん　こんらん
性癖、資産、家族、職業その他種々雜多の素因が混亂し

たがひ　あいかうせう　たうていたんじゆん　りくつ　ぺん　りつ
て互に相交渉するので、到底單純な理屈一遍で律すること

が出來ない。善と知りつゝも夫を行ふことが出來ない、美を欲しても夫を現はすことが出來ない、己を［#「己を」は底本では「己を」］得ず缺點だらけの家を造つて、その中に不愉快を忍んで生活して居るのが大多數であらうと思ふ。

建築の本義は「**善美**」にあると云ふのは、我輩の現今の考へである。併し或る人は建築の本義は「**安價で丈夫**」にあると云ふかも知れぬ、又他の人は建築の本義は「**美**」であると云ふかも知れぬ。又他の人は建築の本義は「**實**」であると云ふかも知れぬ。孰れが正で孰れが邪であるかは容易に分らない。人の心理狀態は個々に異なる、その心理は境遇に從て［#「從て」はママ］移動すべき性質を有て居る。自分の一時の心理を標準とし、之を正しいものと獨斷して、他の一時の心理を否認することは兎角誤妄に陷るの虞れがある。これは大に考慮しなければならぬ事である。

莫遮現今建築の本義とか理想とかに就て種々なる異論のあることは洵に結構なことである。建築界には絶へず何等かの學術的風波がなければならぬ、然らざれば沈滞の結果腐敗す

るのである。偶には激浪怒濤もあつて欲しい、惡風暴雨もあつて欲しい、

と云つて我輩は決して亂を好むのではない、只だ空氣が五日の風に由

て掃除され、十日の雨に由て淨められんことを希ふのである。世の

建築家は勿論、一般人士が絶へず建築界に問題を提出し

て論議を鬪はすことは極めて必要なことである。假令その論議が

多少常軌を逸しても夫は問題でない。これと同時にその論議を

具體化した建築物の實現が更に望ましいことである。假令その

成績に多少の缺點が認められても夫は問題でない。問題は

各自その懷抱する所を遠慮なく披瀝した處のものが、所謂

建築の根本義の解決に對して如何なる暗示を與へるか、如何なる

貢献を致すかである。

建築の本義、夫は永久の懸案である。我輩は今俄かに之

が解決を望まない、ただいつまでも研究をつゞけて行き度い、世に建築

てふ物の存在する限り、いつまでも論議をつゞけて行き度い。今日

建築の根本義が決定されなくとも深く憂ふるに及ばない。安んじ

て汝の好む所を食へ、然らば汝は養はれん。安んじて汝の好む家に住へ、然らば汝は幸福ならん。（了）

（大正十二年九月「建築世界」）

底本：「木片集」萬里閣書房
　　1928（昭和3）年5月28日発行
　　1928（昭和3）年6月10日4版
初出：「建築世界」
　　1923（大正12）年9月
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：鈴木厚司
校正：しだひろし
2007年11月22日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。